連歌師宗長の肖像

鶴崎裕雄

一　『紹巴富士見道記』の宗長の肖像

永禄一〇年（一五六七）富士一見のため駿河に下向した紹巴は、宗長の旧跡柴屋軒を尋ねた。宗長は天文元年（一五三二）に没しているので、すでに三五年が経過している。紹巴の紀行『紹巴富士見道記』（群書類従一八輯）には、柴屋軒について次のように記す。

谷を三町余り左のかたへ入て、庵室を見めぐるに、一休和尚墨跡に、柴屋と古文字、宗長像掛れり。影をうつす事、命のうちは戒められしか、但無跡にもとゞめば、もえぎの衣服に墨染をうへにして、水巻のたびに扇子をそばにしと云りとて、さながら也。賛には逍遙院殿二首、御自筆鮮にして、庭上には廿六年をかさねたる石上緑苔宗長の印塔は破壊して古木梅生たり。一年国の乱に回禄せりと云々。東に天柱と号せる山あり。此僧周桂宗牧の古をも語り給へり。かくても一夜はあらまほしけれど、帰に長公畑をひらき庵を結べるかた岡ををしへ、今かたのごとくすまゐける二時の園などに行伴ひて、くれ〳〵に府中に入。

紹巴は、宇津山を越え、東海道の丸子の里より左手に折れて泉谷に入る。そこには、今も宗長の旧跡、吐月峰柴屋寺がある。その奥に姿のよい天柱山が聳える。紹巴は一休宗純が宗長に書き与えた「柴屋」の墨跡を見る。[1] 次いで宗長の肖像を見る。

生前、宗長は自分の肖像を描かすのを嫌った。ただし亡くなった後では、萌葱色の着物の上に墨染の僧衣を着せ、水巻の足袋を履き、傍らに扇子を置いた姿で描くことを言い遺した。水巻は、煙草の時に糸を巻いて白い模様を残すという水巻革である。萌葱色といい、水巻の足袋といい、当時としては洒落た装いであったのか。「さながら也」とは、紹巴が伝え聞くダンディな宗長の姿をいったのではなかろうか。肖像の賛には、逍遙院三条西実隆の自筆の歌が二首書かれていた。宗長は大永六年（一五二六）一一月、京都の戦乱を避け

て近江国矢島の小林寺に移るまでは、たびたび実隆を訪ね、懐紙や色紙の歌を与えられたことが実隆の日記の『実隆公記』や日次歌集の『再昌草』に見える。[2] また大永七年の駿河帰国後も実隆と歌の贈答を行っており、天文元年の没後にも、四十九日や百ヶ日・一周忌・三回忌には実隆によって歌会が催され、その懐紙や短冊が駿河にも送られたであろう。実物がないので、紹巴の記述からではよくわからないが、懐紙か色紙に書かれた実隆自筆の歌を宗長の肖像の上部に貼り合わせたものと考えられる。

もう一人、柴屋軒で宗長の肖像を見た人物がいる。宗長の弟子、宗牧である。紹巴の駿河下向より二三年前、天文一三年（一五四四）白河一見の旅の途中、宗牧は駿河に立ち寄った。宗牧の紀行『東国紀行』（群書類従一八輯）によると、宗牧はまず、駿府に着いて今川氏輝に挨拶をし、連歌興行を済ませた後、柴屋軒を訪ねたとある。

柴屋よしみの人々さそはれたれど、歳暮なればさはる事ありて、一両人ばかり。なお其興ありけむ。今年は十三回なれば、於近衛殿和漢百韻詩歌一続興行つかうまつりたり。懐紙影前におかれて其世の物語、老涙とゞめがたし。水石かはらず。手づからうへられし梅楊かつめぐみて、けふをまちがほなる庭のけしきなり。

歳暮のことでもあり、同行は一両人ばかりであった。その年は宗長の十三回忌に当たったので、近衛尚通・稙家邸で宗長追悼の和漢百韻と詩歌一続を行った。宗牧はその懐紙を携えて下向し、宗長の肖像の前に和漢百韻・詩歌一続の懐紙を供えた。宗牧が見たこの宗長の肖像は、紹巴が見たものと同じであろう。宗牧一行は、肖像の前で宗長の在りし日を物語り、老涙を流したのである。次いで庭に目を移すが、この文章は、庭数寄であった宗長をよく表している。[3]

『東国紀行』と『紹巴富士見道記』の宗長に関する記事を比較すると、記述態度にはかなりの相違がある。右に見た宗長の肖像については、宗牧よりも紹巴の方が詳しい。宗長の誕生の地といわれる島田については、『東国紀行』では、

暮はて、嶋田といふ所につきたり。山風吹て疎屋の板戸たまらぬはげしさながら、いざよひの月さよの中山より出て、ふきゆくま、にうす雪散きつ、、さらに忘がたきたびねにぞ。

年たけてふた、ひ越し思ひ出や雪と月とのさ夜の中山

とこ、ろのうちに吟じて、すこしはまどろみたり。

とあって、吹雪の中、島田の旅宿で、以前に小夜の中山を越えたことを思い出し、西行の歌を本歌にして一首吟じた。ところが宗長の出生地云々は記していない。

一方、短文ながら『紹巴富士見道記』では、

嶋田といふ所に、まだ暮やらぬ空ながら、宗長出世の地とき、

てとまり、宇津山にいたりぬ。

とある。まだ暮れてはいないが、宗長の出生地であるので泊まったというのである。

管見の限り、島田が宗長の出生地というのは『紹巴富士見道記』が初見資料のようである。なぜ『紹巴富士見道記』が宗長の出生について触れていて、『東国紀行』では触れていないのであろうか。宗長自身も永正一四年（一五一七）成立の自伝『宇津山記』（群書類従二七輯）では「予つたなき下職のものの子ながら、十八にて法師になり……」と記すが、島田生まれとは書いていない。時代が降って寛文八年（一六六八）福住道祐著『宗長居士伝』（続々群書類従三輯）には「以後花園院御宇文安五年戊辰、生于駿州島田邑、鍛冶義助子也」と明記されるようになる。今後、島田出生・鍛冶義助子など再検討しなければならないと思う。

このように『東国紀行』と『紹巴富士見道記』を比較すると、『東国紀行』の宗長に関する記述は淡泊であるが、『紹巴富士見道記』では宗長の記事が詳しくて、いかにも宗長を語ることによって、連歌師としての自己の存在をアピールするように思われる。それは、信長・光秀・秀吉・秀次に近づき、波瀾万丈の世を生き抜いて、子孫に江戸幕府の連歌宗匠の地位を準備した紹巴の手腕が伺われる記述である。

鎌倉国宝館寄託　建長寺　宗長肖像

ともあれ、詳しい紹巴の記述によって、我々は永禄年間に柴屋軒にあった宗長の肖像をかなり具体的に知ることができるのである。

二　建長寺の宗長の肖像

先年『静岡県史』通史編中世[4]の一部の執筆を引き受けた時、『図説神奈川県史』上[5]で鎌倉の建長寺蔵の宗長肖像の存在を知った。現在は鎌倉国宝館に委託されているというので、早速、静岡県史編纂室の方々と肖像の調査に赴いた。この肖像については、すでに岩橋春樹氏の「近年出現した宗長画像について」という論文[6]があって、詳しく紹介されている。以下、岩橋氏の論文を参照しつつ、建長寺の宗長の肖像を見る。

肖像は、縦九八センチ、横四四・三センチの淡彩紙本の掛軸に、

緑色の着物に黒い衣をまとった法体の座像が描かれている。全体を少し右に向けているので、大きな右の耳がよく見える。口の回りには無精髭のような髭がうっすらと描かれている。右手には閉じた白い扇子を左胸のところで上向きかげんに構え、左手はちょっと衣を摘んで左膝に添えている。その左膝の脇に横笛のような管楽器が置かれている。宗長が得意とした一節切の尺八を描いたのであろうか。向かって右下、ちょうど衣の左下端に「狩野洞元生信筆」と署名があり、「観月」と彫り出した朱文方印が捺されている。

画像の上部には左から右へと書いた逆賛の銘文がある。

（白文長円印）放一綫□

長也嗣祇　稱連歌僊

藍氷馳誉　編輯與玄

批柴屋月　抹薪里煙

侶大應風　参一休禅

遺吟熱海　滌痾温泉

託真斯地　墓石儼然

隠士宗長久菴之真影一燈高野氏

幽山使畫工寫之寄附天源因以數語賛之

時元禄第二春三月初六

前建長現住天源老頭陀龍室湛書　龍室（朱文方印）　碩湛之印（白文方印）

試みに銘文と跋を次のように読み下してみた。

長（宗長）や、祇（宗祇）を嗣ぎて、連歌の僊（名人）と稱せらる。藍氷誉を馳せ、編輯玄（連歌師玄清を指すか）と與す。柴屋（柴屋軒）の月を批り、薪里（薪の酬恩庵）の煙を抹ふ。大應（大応国師）の風を侶とし、一休（一休和尚）の禅に参ず。吟を熱海に遺し、痾を温泉に滌ぐ。真を斯の地に託し、墓石儼然たり。

隠士宗長久菴の真影一燈、高野氏幽山、畫工をして之を寫せしめ、天源に寄附す。因って數語を以って之を賛す。

銘文の後の跋文から、この宗長肖像の掛軸は高野幽山が天源庵に奉納したもので、文は前建長寺住持で天源庵に引退した龍室德湛が元禄二年（一六八九）三月六日に書いたことがわかる。三月六日は宗長の命日で、元禄二年は没後一五七年である。

高野幽山は、本名直重、生年は不明、京都より江戸に移住し、談林俳諧で活躍。立机以前の芭蕉とも親交があった[7]。元禄一〇年ころ、伊勢国久居に移り、元禄一五年、久居で没した。岩橋氏は前掲の論文で、幽山が数年来天源庵で宗長忌を営んだ資料を紹介し、「この宗長画像は忌日供養に掛けるべく意図されたもの」と推定する。

画家の狩野洞元生信は『古画備考』[8]の狩野門人譜に、

素川信政二男

∴洞元邦信　始久馬介、貞享四武鑑　生信ト出。

常憲院（徳川綱吉）様御代御目見仕、元禄十三年辰年八月廿三日屋敷被下、享保年中世留焼失仕、相知不申候、宝永三戌年八月三日卒、年六十四、法名随縁院洞元観月。

とある。

宗長と建長寺天源庵との関係は深い。まず宗長が永正六年（一五〇九）に関東を廻った紀行『東路の津登』（群書類従一八輯）に見える。宗長は、七月に駿河を発ち、武蔵・上野・下野を廻り、一〇月に武蔵国勝沼、次いで江戸を訪ねる。

又かつぬまにつきぬ。建長寺天源庵は、横山嶽の開山大応国師遷化の旧跡也。いぬる五とせばかりのさきのとし回禄す。庵領なども久しく（不）知行して、およそなきが如くなり。紫野大徳寺衆中、たびたび申くださるといへども、とかくことゆかず。此折ふしに堅真と云人、多年の知人にて、うちうちに申ったふこと有て、江戸の館に六、七日におよべり。連歌三百韻あり。

霜寒き松ゆく田鶴の朝日かな　上杉　建芳

遠山にこゝろはゆきの朝戸かな

雪はけさ水につもれるみそれ哉

こゝろは雪のといへるあたり、ふるめかしくて、しかも又めづらしげ也。一日づつ隔て、おもしろかりし会席也。すなはち天源庵領二箇所かへしつけらるべきよし、厳重の事也。都鄙いまの折ふしには、希有の事なるべし。……

ここで宗長は、天源庵が大応国師（建長寺の一三世南浦紹明）の塔所であり、その領地の知行が行われず、無きが如きと説明する。誰が天源庵領を押領していたかわからないが、江戸館で連歌三百韻を巻き、上杉建芳から天源庵の知行の確保を取り付けたのである。

建芳は扇谷上杉朝良の法名である。上杉定正の養子となり、山内上杉顕定と合戦中の定正の急死により家督を嗣いだ。永正元年（一四〇四）には北条早雲・今川氏親の援軍を得て、武蔵国立河原で勝利をおさめたが、翌年には河越城で降伏し、家督を養子朝興に譲って江戸城に隠棲した。建芳が今川氏と同盟関係にあったことが宗長との関係も一層親しくしたのであろうが、連歌三百韻の張行によって知行の回復を取り付けた。宗長の政治手腕を示す一例である。

この後の『東路の津登』に、

鎌倉ちかきあたり……今月五日、天源庵にたちよりて侍りし。修理のこと申あはせなどするほどに……

とある。前の引用のように、天源庵は「いぬる五とせばかりのさきのとし回禄す」とあるので、宗長は庵室の再建修理にも尽力したのであろう。

大応国師こと南浦紹明は、嘉禎元年（一二三五）駿河国安倍郡で誕生。同国服織の建穂寺で出家、建長寺の蘭渓道隆に師事し、正元

元年（一二五九）入宋。帰国後、博多の横岳山崇福寺[39]を開山、引用文中の「横山嶽」である。徳治二年（一三〇七）建長寺一三世の住職となり、翌年に没した。天源庵は没後、二〇年ほど後に建立された。

天源庵と宗長の結び付きには、大応国師が介在する。その大応国師と宗長を結び付けるものは、一は建穂寺、二は一休宗純である。一の建穂寺については、『宗長手記』下（島津忠夫校注『宗長日記』岩波文庫）の中で、山城国の醍醐寺に赴いた時、宗長は「宗長の師匠、駿河の宰相とて、此院家に宮づかへせし人也」と回想する。中川芳雄氏は、醍醐寺の院家に宮仕えした駿河の宰相なる人物に注目し、宗長が出家して最初に学問の道に入ったのは醍醐寺の末寺であり、当時の駿府の近郊にあって繁栄していた服織の建穂寺であると推定した。[40]この推定は正しいであろう。

二の一休については、若き日の宗長が京都で宗祇について連歌の道に励んだ時、一休の許にも参禅しており、生涯を通して一休に帰依している。その一休は大応国師南浦紹明の学風を嘉っていた。[41]宗長と建長寺天源庵は、建穂寺と一休との二重の絆で結ばれている。引用文中、紫野大徳寺衆中がたびたび天源庵領について宗長に申し下したのも、こうした背景があったからである。

この後、宗長と建長寺の関係として、大永五年歳暮に駿府で建長寺東堂たちと和漢連歌の張行（『宗長手記』下）や、享禄二年（一五二九）秋の建長寺滞在（『実隆公記』（続群書類従完成会）同年八月二二日条・一〇月七日条の三条西実隆宛の宗長の書状）が見える。

宗長没後、天源庵に宗長の墓碑が建てられ、江戸時代を通じて墓碑は存在していた。ところが、明治以後、天源庵は龍源軒と合併して現在の場所に移動し、今は天源院という。前の天源庵の旧跡は鎌倉学園中学・高等学校の運動場になっており、今では宗長の墓碑は見あたらないということである。

三　柴屋寺の宗長の肖像

宗長の草庵柴屋軒を受け継ぐ柴屋寺の本堂裏の御影堂には、宗長と宗祇の木造座像が安置されていて、宗長像としてはこの木像が最もよく知られている。木像の高さはおよそ六八センチ、長い顔・深い皺・大きい耳たぶ、全体におどけたような表情が特徴である。宗祇像は、高さはおよそ三九・五センチ、サンタクロースのような豊かな髭が印象深い。宗長像とはまったく作風を異にする。

静岡県史の執筆のため、幾度か柴屋寺に訪れるうち、ご住職に鎌倉国宝館寄託の建長寺の宗長の肖像の写真を見せると、柴屋寺にもこれと同じような宗長の掛軸があるということで、日を改めて拝見することができた。

万治三子年十二月御目見、元禄九子年四月屋敷被下、宝永六丑年禁裡御造営御所向、柳雪・柳伯相勤申候、正徳元卯年十二月廿七日新規御扶持方、五人扶持被下、同二辰年八月廿六日病死、年六十七。

とある。

肖像の上部に、縦二〇センチ、横二八センチの白無地の懐紙が貼られていて、次の六首の歌が書かれている。

世をもいとふ又浮世にもいとはれて　慈圓
とまる心のなきそうれしき
野も山もぬしなき方のあらはこそ
そむく心は心にそもつ　暁月
いつるともいるとも月をおもはねは
心にかゝる山のはもなし　夢窓
世をはへんさかふる人をうらやます
をとろへ行をかなしますして　松月
いつもそひいつもあるへき事とみし
人にも世にも遠くわかれて　同
身のはてよいかにかならん人しれぬ
心にはつる心ならすは　公衡

最初の「世をもいとふ」は『拾玉集』や『新千載和歌集』一八

柴屋寺　宗長肖像

掛軸は、宗長の肖像と宗祇の肖像と二本あって、ともに一つの木箱に納められている。まず宗長の肖像は、縦八一センチ、横三一・五センチの淡彩絹本、萌葱色の着物に墨染の衣、右を向いた顔と体、大きな耳、口の回りの無精髭は建長寺の宗長肖像とよく似ているが、右手の閉じた白い扇子は左の膝に軽く置き、左手も左膝に置いている。左膝の脇に管楽器を置く。前に組む足は白地の足袋を履いているが、細い線が斜めに走っている。これが『紹巴富士見道記』に記された水巻革の足袋の模様であろうか。肖像の右隅、墨染の衣の裾端の上部に「狩野柳雪筆」と署名があり、「紫峯」と彫り込んだ白文方印が捺されている。

画家の狩野柳雪は『古画備考』の狩野門人譜に、

柳雪秀信　始内匠、一本外記雪柳斎、正徳三武鑑、宅木引町築地

雑歌下に、三つ目の「いつるとも」は『風雅和歌集』一八　釈教に、四つ目の「世をはへん」と五つ目の「いつもそひ」は『正徹千首』や『草根集』に、最後の「身のはてよ」は『新勅撰和歌集』一七雑歌二に見える。二つ目の暁月は狂歌の祖といわれる冷泉為守、「野も山も」の所収は目下探索中である。

掛軸の裏に、極札と添状が貼られている。極札には「連歌師宗長世をもいとふ（朱文方印）琴山」とあり、添状には、

柴屋に

宗長法師像　一幅　狩野柳雪筆

上ニ宗長自筆古歌六首

古筆了佐極札添之

□津の山すみけん人のうつし絵を見れは見し世にあふ心ちして

元禄七年申戌歳極月六日　　沙弥幽山

とある。「沙弥幽山」とあって、五年前に建長寺天源庵に宗長の肖像を奉納した高野幽山であることがわかる。極札の古筆了佐は、寛文二年（一六六二）九一歳で没した古筆家の始祖、「琴山」の印を用いていた。

極札と幽山の添状によれば、貼付した懐紙の歌は宗長筆である。懐紙を入手した幽山が、狩野柳雪に宗長の肖像を依頼し、「柴屋に」とあるように、柴屋寺に奉納したというのか。

宗長が選んで書写した歌は「憂き世」「身の果て」と、いずれも寂しく悲しい。宗長の晩年の日記『宗長日記』の最後に記された

くまもなき空もみる〳〵かきくらしをば捨山にてる月にして

の一首を思い出させる。

同じ箱に入っている宗祇肖像の掛軸は、これも淡彩絹本、縦八二・四センチ、横四〇センチ、絵そのものは宗長の絵より一回り大きいが、表装はほぼ同じで、軸全体の縦一六〇センチ、横五四センチ、中縁・一文字もそれぞれ同じ模様の布が使われている。画家も、宗長の肖像と同じく、狩野柳雪である。

宗長と違って、さすがに宗祇の肖像は数も多く、よく見かける。[38] 宗祇の肖像には、1正装の法衣をまとって正座したもの、2馬上の旅姿のもの、3脇息にもたれかかってくつろいだものの三つの系統

柴屋寺　宗祇肖像

がある。このうち、1の系統には、宗祇の生存中に描かれ、三条西実隆筆の賛がある旧南部家蔵（現在、国立歴史民俗博物館蔵）の肖像が最もよく知られている。

柴屋寺の宗祇の肖像は、1の系統の法衣をまとって正座したものである。旧南部家蔵の宗祇像の顔は左向きであるが、柴屋寺は右向きであり、南部家蔵よりもふっくらとした丸みのある顔つきである。上部に白地と濃い緑地の秋草模様の色紙が貼られていて、白地には『宗祇集』に見える「うつしをくわか影なから世のうきをしらぬ翁そうらやまれぬる」の歌が、濃い緑地には『老葉』や『新撰菟玖波集』に見える「世にふるはさらに時雨のやとりかな」の句が書かれている。掛軸の裏に「庭田大納言重条卿　宗祇賛」と記した打曇の短冊が貼られていて、宗祇の歌と句の筆者は庭田重条であることがわかる。庭田重条は慶安三年（一六五〇）誕生、兄雅秀の跡を嗣ぎ家督、権大納言になったのは元禄一〇年（一六九七）七月で、翌八月には辞任している。この掛軸が奉納された元禄七年は前権中納言であるので、打曇の短冊は後に貼られたものである。享保一〇年（一七二五）七六歳で没した。

二つの掛軸を納める木箱の蓋の面には「両祖翁画像　二幅」とあり、蓋の内側には、

宇都の山近き柴屋寺となむいへる御寺に住給ひし宗祇宗長のふたりの法の師のうつそみのかたを写し止て、今の現に伝はへるを、年経からにかさりのきぬのはつれつゝ、虫さへはみて乱かはしく成行しを、さらに甫（一幅か）ひて、これのみてらにをさめ侍るになむ

うつの山現に今もみつるかな夢のむかしの人のおもかけ

享和の二とせといふとしかみな月に記し侍りぬ　□（由か）子

とある。箱の底の内側には「再建　東都北郷五明楼主」とあり、外側には「江都新吉原江戸町　扇屋宇右衛門」とある。

文中「みてらにをさめ侍りぬ」とあるので、二本の掛軸は、享和二年（一八〇二）□（由か）子によって柴屋寺に奉納されたのか。または奉納は、建長寺の宗長の肖像と同じように高野幽山によって奉納され、享和二年、傷んだ掛軸が□（由か）子によって修理されて、再度奉納されたというのか。

□（由か）子は不明。五明は扇の異称。五明楼は新吉原の妓楼扇屋のこと。扇屋は大門を入って中ノ町を左に曲った江戸町一丁目、左側三軒目の店で、名妓花扇たちがいた。扇屋宇右衛門は『吉原細見』（国文学研究資料館マイクロコピー）の明和九年（一七七一）版・文政六年（一八二三）版に見えるが、天保十年（一八三九）版では扇屋宇兵衛となり、安政七年（一八六〇）版では伊勢屋となっている。

現在、柴屋寺では、毎年三月六日の宗長の忌日にはこの掛軸を掛

け供養を営むとのことである。

宗祇の肖像はよく見かけるが、宗長の肖像はまったく知らなかった。それをこのようにして目にすることができた。しかも紹巴が記した肖像と非常によく似た絵柄である。宗祇の肖像はいつも髭が特徴的に描かれるのに対し、宗長像は大きな耳が印象的である。それらの特徴が柴屋寺の宗長・宗祇の木像にも見られることは興味深い。

注

① 中本環「一休宗純と柴屋軒宗長」中世文芸叢書『連歌とその周辺』広島中世文芸研究会　昭和42。

② 拙稿「『実隆公記』『再昌草』に見る連歌師宗長」『帝塚山学院短期大学研究年報』41　平成5。

③ 拙稿「あら〳〵無下の庭数寄候哉－連歌師宗長の晩年－」『帝塚山学院短期大学研究年報』26　昭和53。後「連歌師宗長の晩年」と改題して今川氏研究会『駿河の今川氏』5　昭和55に再録。

④ 『静岡県史』通史編中世編2　静岡県　平成9。

⑤ 『図説神奈川県史』上　有隣堂　昭和61。

⑥ 岩橋春樹「近年出現した宗長画像について」『鎌倉』43　鎌倉文化研究会　昭和6。

⑦ 阿部正美『芭蕉と幽山』『連歌俳諧研究』20　昭和35。

⑧ 朝岡興禎著・太田謹増訂『古画備考』吉川弘文館　明治37。

⑨ 重松裕巳編『宗長作品集〈日記・紀行〉』古典文庫四四三、祐徳稲荷神社中川本ほかにより補う。

⑩ 文明一二年（一四八〇）宗祇の『筑紫道記』の旅に随行して宗長も筑前国博多の崇福寺を訪ねている。

⑪ 『静岡市史』静岡市役所　昭和56。

⑫ 例えば、大応国師と一休の関係は『狂雲集』の「賛大応国師」

　看々仏日照乾坤　天上人間唯独尊
　禅老如無渡東海　扶桑国裡暗昏々

⑬ 水巻革に関する適切な資料が見つからず、『日本の美術342　革工芸』（至文堂　平6）に写真があった。

⑭ 宗祇の肖像に関しては、平成二年一一月に神奈川県箱根町の町立郷土資料館で開催された「連歌師宗祇－その生涯と終焉の地箱根湯本－」の図録にかなり集められている。この時の展覧会は、地方の資料館としては充実して質が高く、関係者の意気込みが感じられる内容であった。

建長寺天源院の小沢秀行師・柴屋寺の村田俊道師をはじめ、鎌倉国宝館・静岡県史編纂室の方々のお世話になりました。お礼申し上げます。

（つるさき　ひろお／帝塚山学院短期大学学長）